

## 1-9 現代に伝わる製品と参考図 (D) — 帯留、羽織鎖、提げ物

ここでは、和装の正面を飾る装身具である各種の帯留を中心に、羽織鎖と、帯に提げる提げ物を紹介する。

帯留は数少ない日本のオリジナル装身具でその歴史は古い。櫛や簪が全盛期を迎えていた江戸時代後期の文化十年（1813）頃にはすでに用いられていた。

当初は帯を留める実用的装身具として始まり、つける人も限られていたが明治九年（1876）の廃刀令（帯刀禁止令）以降は多くの彫金師が帯留制作に携わるようになったため急速に発達した。

その頃の帯留は「パチン留」と呼ばれた。金具の形状は上下同形で、下金具の切り込み部分に上金具の突起部分を差し込んで固定する仕組みだった。差し込んだ時にパチンと音がするためパチン留と呼ばれた。

金具の形状に変化が現われるのは明治後期からで、大正時代には、パチン式に代わり、裏の突起部分にもう片側の金具を引っ掛けて留める「引っ掛け式」が主流となった（現在と同じ「紐通し式」金具が主流になるのは昭和初期から）。帯留発生の経過や金具の形状については、すでに『日本の宝飾文化史』や『よくわかる日本の装身具』<sup>⑦⑩</sup>で説明しておいたので、こちらも参考にしていたきたい。

羽織の紐に貴金属の鎖が使われるようになったのは帯留よりずっと後の明治後期からで大正期になって盛んになった。

提げ物は、通称「ぶら」とか「根付け」と呼ばれる帯から提げる装身具。これについても取り上げる。

## 帯留

大正前期に流行がはじまり、大正後期頃まで愛用されたと思われる帯留から紹介する。

図1-9-1は金製らしき彫金の帯留め着用写真。図1-9-2は当時流行していたヒスイの帯留の着用写真。いずれの女性も、帯を胸高に結び、帯留はやや斜めにつけて崩しの美を表現している。

大正前期は和装の重要な装身具として帯留に注目が集まった時代で、有力小売店は積極的に広告を打った。そのなかから何点か紹介し、その時代に、どのような帯留が好まれたのかをまず見ておく。

【図1-9-3と図1-9-4は江戸時代からの老舗の白牡丹本店の広告。この店は彫金の帯留に力を入れていた。

【図1-9-5は明治前期創業の丸嘉の広告。丸嘉は宝石に力を入れていた小売店で、彫金の帯留の他、ダイヤモンドや真珠を使った帯留の販売にも積極的。

地金は金（主に18金）に部分的にプラチナを交えて高級感を出すことが多かった。ホワイト・ゴールド（WG）はまだ開発されていないので使われることはなかった（WGの使用は大正後期から）。



図1-9-2  
ヒスイの帯留着用姿  
絵葉書より



図1-9-1  
彫金の帯留着用姿  
大正2年、白木屋呉服店絵  
葉書より

次に、この時代を特徴づける帯留の金具がよく分かる広告を紹介する。

図1-9-6は玉屋商店の彫金透し帯留と小粒宝石入り帯留広告。この時代は「引っ掛け式」金具が主流だが、昭和初期から多くなる「紐通し式」金具もすでに出ていることがこの広告から分かる。金具の形式は帯留の時代推定の重要な目安だが、このような例外的なものもあるので注意したい（それとは逆に昭和初期のもので「引っ掛け式」のものもある）。



図 1-9-5  
丸嘉帯留広告  
大正 2 年 2 月 『演芸画報』



図 1-9-4  
白牡丹本店帯留広告  
大正 4 年 3 月 『婦人世界』



図 1-9-3  
白牡丹本店帯留広告  
大正 3 年 4 月 『婦人世界』

帯留には貴金属の帯留、彫金で加工した彫金の帯留、宝石を主にした宝石の帯留といろいろあるが、ここでは貴金属や彫金の帯留から紹介する。

図1-9-8はやはり金にプラチナ交りの透し細工の帯留。



図1-9-7  
彫金の金にプラチナ交り帯留  
表図  
下写真を見ると「引っ掛け式」金具の形式がよくわかる。

図1-9-7は前図とほぼ同様のデザインの、「引っ掛け式」金具による彫金の金にプラチナ交り帯留。上は表から、下は裏から見たところ。

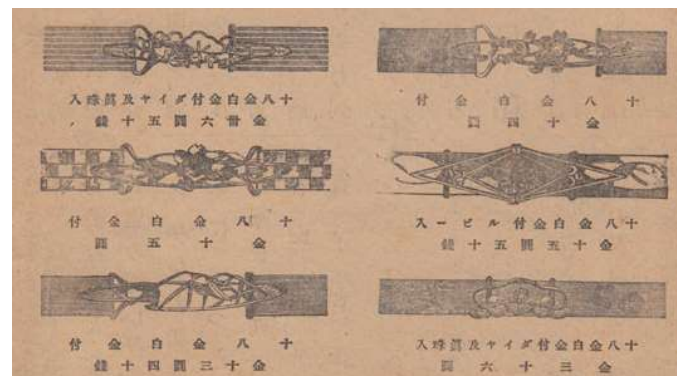


図1-9-6  
金(K18)彫金透し帯留と小粒宝石入帯留  
プラチナ交り、小粒宝石はダイヤモンド、真珠、ルビーなど  
大正4年11月『婦人画報』より  
左3点と右上1点は「引っ掛け式」金具。右中と右下は「紐通し式」金具。



図 1-9-10

彫金の帯留

舌切雀図

赤銅、銅、部分金銷し、裏座

はK18

光正

大勝堂

昔噺しの報恩説話が題材。黒

い部分は赤銅。

こうした安価な素材の帯留はたくさんあったが、だがこれらは型打による量産品。裕福な女性は工芸的価値の高い手造りによる彫金作品を欲し、小売店もそれに応えた。図 1-9-10 は大勝堂の彫金の帯留。図 1-9-11 は丸嘉が取り扱った彫金の帯留。



図 1-9-9

銀の帯留 2 種

上：水仙図 下：小花図

すべての女性が金の帯留をつけることが出来たわけではなかった。安価な銀の帯留もたくさん作られた(図 1-9-9)。また、すでに 1-5 の大正時代の装身具用地金で説明したように、銀よりさらに安価な洋白(洋銀)に金銷(めっき)で装飾した帯留も発売されていた。



図 1-9-8

金透しプラチナ交り帯留

菊図



図 1-9-11  
彫金の帯留  
栗穂あおほ図  
赤銅、金象嵌、裏座は金  
丸嘉共箱入り  
黒い部分は赤銅。

図 1-9-12 は金地金をたつぷり使い、細工も良い豪華な一点物の彫金帯留。黒く見るとところは赤銅。赤銅の黒を加えることにより、金の華やかさが一層引き立っている。



図 1-9-12  
金と赤銅の彫金帯留  
藤図

図 1-9-13 は名工中の名工といわれた二代豊川光長（1851～1923）による帯留。表面は銅中心で華やかさをおさえた逸品。眼は金銀象嵌で裏座は18金。裏座に金を使っているのは、表は渋く、裏は派手にとり江戸以来の伝統の美意識から。光長は大正12年の関東大震災で死去しているので、この帯留は光長の帯留としては晩年の作。



図 1-9-14  
赤銅魚子金銀裝飾帶留  
春蘭図



図 1-9-13  
銅の彫金（打出し）帶留  
金銀象嵌、裏座は金  
五ツ面図  
豊川光長作

図 1-9-14 は江戸時代に作られた刀装具の小柄（刀の鞘にさし添える小刀の柄）を転用して引っ掛け金具を取り付け帯留にしたもの。江戸時代の刀装具には優品が多いため、それらを改作してこのような帯留もしばしば作られた。黒く見えるのは赤銅で、一面に魚子（小さな粒状細工）が施されている。